

坂口安吾

恋愛論



恋
愛
論

恋愛とはいかなるものか、私はよく知らない。そのいかなるものであるかを、一生の文学に探しつづけているようなものなのだから。

誰しも恋というものに突きあたる。あるいは突きあたらずに結婚する人もあるかもしれない。やがてしかし良人は妻を愛す。あるいは生れた子供を愛す。家庭そのものを愛す。金を愛す。着物を愛す。

私はフザけているのではない。

日本語では、恋と、愛という語がある。いくらかニユアンスがちがうようだ。あるいは二つをずいぶん違ったように解したり感じたりしている人もあるだろう。外国では（私の知るヨーロッパの二、三の国では）愛も恋も同じで、人を愛すという同じ言葉で物を愛すという。日本では、人を愛し、人を恋しもするが、通例物を恋すとはいわない。まれに、そういう時は、愛すと違った意味、もう少し強烈な、狂的な力がこめられているような感じである。

もつとも、恋す、という語には、いまだ所有せざるも

のに思いこがれるようなニュアンスもあり、愛すという
と、もっと落ちついて、静かで、澄んでいて、すでに所
有したものを、いつくしむような感じもある。だから恋
すという語には、もとめるはげしさ、狂的な祈願がこめ
られているような趣きでもある。私は辞書をしらべたわ
けではないのだが、しかし、恋と愛の二語に歴史的な、
区別され限定された意味、ニュアンスが明確に規定され
ているようには思われぬ。

昔、^{キリシタン}切支丹が初めて日本に渡来したころ、この愛とい
う語で非常に苦労したという話がある。あちらでは愛す

は好むで、人を愛す、物を愛す、みな一様に好むという平凡な語が一つあるだけだ。ところが、日本の武士道では、不義はお家の御法度はつとで、色恋というと、すぐ不義とくる。恋愛はよこしまなものにきめられていて、清純な意味が愛の一字にふくまれておらぬのである。切支丹は愛を説く。神の愛、キリシトの愛、けれども愛は不義につらなるニュアンスが強いのだから、この訳語に困惑したので、苦心のあげくに発明したのが、たいせつという言葉だ。すなわち「神デウスのごたいせつ」「キリシトのごたいせつ」と称し、余は汝を愛す、というのを、余は汝

をたいせつに思うと訳したのである。

実際、今日われわれの日常の慣用においても、愛とか恋は何となく板につかない言葉の一つで、僕はあなたを愛します、などという、舞台の上でウワの空にしやべっているような、われわれの生活の地盤に密着しない空々しさが感じられる。愛す、というのは何となくキザだ。そこで、僕はあなたが好きだ、という。この方がホンモノらしい重量があるような気がするから、要するに英語のラヴと同じ結果になるようだが、しかし、日本語の好きだ、だけでは力不足の感があり、チョコレートな

みにしかすきでないような物たりなさがあるから、しかたなしに、とてもすきなんだ、と力むことになる。

日本の言葉は明治以来、外来文化に合わせて間に合わせた言葉が多いせいか、言葉の意味と、それがわれわれの日常に慣用される言葉のイノチがまちまちであったり、同義語が多様でそのおのにおのもやに霽もやがかかっているような境界線の不明確な言葉が多い。これを称して言葉の国というべきか、われわれの文化がそこから御利益ごりやくを受けているか、私は大いに疑っている。

惚ほれたというと下品になる、愛すというといくらか上

品な気がする。下品な恋、上品な恋、あるいは実際いろいろの恋があるのだから、惚れた、愛した、こう使いわけて、たった一字の動詞で簡単明瞭に区別がついて、日本語は便利のようだが、しかし、私はあべこべの不安を感じる。すなわち、たった一語の使いわけによって、いともあざやかに区別をつけてすましてしまうだけ、物自体の深い機微、独特な個性的な諸表象を見のがしてしまう。言葉にたよりすぎ、言葉にまかせすぎ、物自体に即して正確な表現を考え、つまりわれわれの言葉は物自体を知るための道具だという、考え方、観察の本

質的な態度をおろそかにしてしまふ。要するに、日本語の多様性は雰囲氣的でありすぎ、したがって、日本人の心情の訓練をも雰囲氣的にしている。われわれの多様な言葉はこれをあやつるにきわめて自在ほうじよう豊饒な心情的よくや沃野を感じさせてたのもしい限りのようだが、実はわれわれはそのおかげで、わかったようなわからぬような、万事雰囲氣ですまして卒業したような気持になっているだけの、原始詩人の言論の自由に恵まれすぎて、原始さながらのコトダマのさきはふ国に、文化の借り衣裳をしているようなものだ。

人は恋愛というものに、特別雰囲気を空想しすぎてい
るようだ。しかし、恋愛は、言葉でもなければ、雰囲気
でもない。ただ、すきだ、ということの一つなのだろう。
すきだ、という心情に無数の差があるかもしれぬ。その
差の中に、すき、と、恋との分があるのかもしれないが、
差は差であって、雰囲気ではないはずである。

恋愛というものは常に一時の幻影で、必ず亡び、さめ
るものだ、ということを知っている大人の心は不幸なも
のだ。

若い人たちは同じことを知っていても、情熱の現実の生命力がそれを知らないが、大人はそうではない、情熱自体が知っている、恋は幻だということ。

年齢には年齢の花や果実があるのだから、恋は幻にすぎないという事実については、若い人々は、ただ、承った、ききおく、という程度でよろしいのだと私は思う。

ほんとうのことというものは、ほんとうすぎるから、私はきらいだ。死ねば白骨になるという。死んでしまえばそれまでだという。こっとうあたりまえすぎることは、無意味であるにすぎないものだ。

教訓には二つあって、先人がそのために失敗したから後人はそれをしてはならぬ、という意味のものと、先人はそのために失敗し後人も失敗するにきまつているが、さればと行って、だからするなとはいえない性質のものと、二つである。

恋愛は後者に属するもので、所詮しよせん幻であり、永遠の恋などは嘘の骨頂だとわかっていても、それをするな、と いい得ない性質のものである。それをしなければ人生自体がなくなるようなものなのだから。つまりは、人間は死ぬ、どうせ死ぬものなら早く死んでしまえということ

が成り立たないのと同じだ。

私はいつたいに万葉集、古今集の恋歌などを、真情が素朴純粹に吐露されているというので、高度の文学のようという人々、そういう素朴な思想が嫌いである。

極端にいえば、あのような恋歌は、動物の本能の叫び、犬や猫がその愛情によって吠え鳴くことと同断で、それが言葉によって表現されているだけのことではないか。

恋をすれば、夜もねむれなくなる。別れたあとには死ぬほど苦しい。手紙を書かずにいられない。その手紙がどんなにうまく書かれたにしても、猫の鳴き声と所詮は

同じことなので、以上の恋愛の相は万代不易ふえきの眞実であるが、眞実すぎるから特にいふべき必要はないので、恋をすれば誰でもそうなる。きまりきったことだから、勝手にそうするがいいだけの話だ。

初恋だけがそうなのではなく、何度目の恋でも、恋は常にそういうもので、得恋は失恋と同じこと、眠れなかったり、死ぬほど切なく不安であったりするものだ。そんなことは純情でもなんでもない、一、二年のうちには、また、別の人にそうなるのだから。

私たちが、恋愛について、考えたり小説を書いたりす

る意味は、こういう原始的な（不変な）心情のあたりまえの姿をつきとめようなどということではない。

人間の生活というものは、めいめいが建設すべきものなのである。めいめいが自分の人生を一生を建設すべきものなので、そういう努力の歴史的な足跡が、文化というものを育てあげてきた。恋愛とても同じことで、本能の世界から、文化の世界へひきだし、めいめいの手によってこれを作ろうとするところから、問題がはじまるのである。

A君とB子が恋をした。二人はおのおのねむられぬ。

別れたあとでは死ぬほど苦しい。手紙を書く、泣きぬれる。そこまでは、二人の親もそのまた先祖も、孫も子孫も変わりが無いから、文句はいらぬ。しかし、これほど恋しあう御両人も、二、三年後には御多分にもれず、つかみあいの喧嘩もやるし、別の面影を胸に宿したりするのである。何かよい方法はないのかと考える。

しかし、たいがいそこまでは考えない。そしてA君とB子は結婚する。はたして、例外なく倦怠けんたいし、仇心も起きてくる。そこで、どうすべきかと考える。

その解答を私にだせといっても、無理だ。私は知らな

い。私自身が、私自身だけの解答を探しつづけているにすぎないのだから。

私は妻ある男が、良人おっとある女が、恋をしてはいけな
いなどとは考えていない。

人は捨てられた一方に同情して捨てた一方を憎むけれども、捨てなければ捨てないために、捨てられた方と同様の苦痛を忍ばねばならないので、なべて失恋と得恋は苦痛において同様のものだと私は考えている。

私はいったいに同情はすきではない。同情して恋をあ

きらめるなどというのは、第一、暗くて、私はいやだ。

私は弱者よりも、強者を選ぶ。積極的な生き方を選ぶ。この道が実際は苦難の道なのである。なぜなら、弱者の道はわかりきっている。暗いけれども、無難で、精神の大きな格闘が不要なのだ。

しかしながら、いかなる真理も決して万人のものではないのである。人はおのおの個性が異なり、その環境、その周囲との関係が常に独自のものなのだから。

私たちの小説が、ギリシヤの昔から性懲りもなく恋愛を堂々めぐりしているのも、個性が個性自身の解決をす

る以外に手が無いからで、何か、万人に適した規則があつて恋愛を割りきることができたら、小説などは書く要もなく、また、小説の存する意味もないのである。

しかし、恋愛には規則はないとはいふものの、実は、ある種の規則がある。それは常識というものだ。または、因習というものである。この規則によつて心のみたされず、その偽りに服しきれない魂が、いわば小説を生む魂でもあるのだから、小説の精神は常に現世に反逆的なものであり、よりよきなにかを探しているものなのである。しかし、それは作家の側からのいい分であり、常識の側

からいえば、文学は常に良俗に反するものだ、ということになる。

恋愛は人間永遠の問題だ。人間ある限り、その人生のおそらく最も主要なるものが恋愛なのだろうと私は思う。人間永遠の未来に対して、私が今ここに、恋愛の真相などを語りうるものでもなく、またわれわれが、正しき恋などというものを未来に賭けて断じうるはずもないのである。

ただ、われわれは、めいめいが、めいめいの人生を、せいっぱいに生きること、それをもってみずからだけ

の真実を悲しく誇り、いたわらねばならないだけだ。

問題は、ただ一つ、みずからの真実とは何か、という基本的なことだけだろう。

それについても、また、私は確信をもつていいいうる言葉をもたない。ただ、常識、いわゆるじゆんふう醇風良俗なるものは真理でもなく正義でもないということ、醇風良俗によって悪徳とせられること必ずしも悪徳ではなく、醇風良俗によって罰せられるよりも、自我みずからによって罰せられることを怖るべきだ、ということだけはいい得るだろう。

しかし、人生は由来、あんまり円満多幸なものではない。愛する人は愛してくれず、欲しいものは手に入らず、概してそういう種類のものであるが、それぐらいのことは序の口で、人間には「魂の孤独」という悪魔の国が口をひろげて待っている。強者ほど、大いなる悪魔を見、争わざるを得ないものだ。

人の魂は、何物によっても満たし得ないものである。特に知識は人を悪魔につなぐ糸であり、人生に永遠なるもの、裏切らざる幸福などはあり得ない。限られた一生

に、永遠などとはもとより嘘にきまっついて、永遠の恋などと詩人めかしていうのも、単にある主観的イマジユをもてあそぶ言葉の綾あやだが、こういう詩的陶醉は決して優美高尚なものでもないのである。

人生においては、詩を愛すよりも、現実を愛すことから始めなければならぬ。もとより現実には常に人を裏ぎるものである。しかし、現実の幸福を幸福とし、不幸を不幸とする、即物的な態度はともかく厳肅なものだ。詩的態度は不遜ふそんであり、空虚である。物自体が詩であるときに、初めて詩にイノチがありうる。

プラトニック・ラヴと称して、精神的恋愛を高尙だといふのも妙だが、肉体は軽蔑しない方がいい。肉体と精神というものは、常に二つが互に他を裏切ることが宿命で、われわれの生活は考えること、すなわち精神が主であるから、常に肉体を裏切り、肉体を軽蔑することに馴れているが、精神はまた、肉体に常に裏切られつつあることを忘るべきではない。どちらも、いい加減なものである。

人は恋愛によつても、みたされることはないのである。何度、恋をしたところで、そのつまらなさがわかるほか

には偉くなるということもなさそうだ。むしろその愚劣さによって常に裏切られるばかりであろう。そのくせ、恋なしに、人生は成りたため。所詮人生がバカげたものなのだから、恋愛がバカげていても、恋愛のひけめになるところもない。バカは死ななきや治らない、というのが、われわれの愚かな一生において、バカは最も尊いものであることも、また、銘記しなければならぬ。

人生において、最も人を慰めるものは何か。苦しみ、悲しみ、せつなさ。さすれば、バカを怖れたもうな。苦しみ、悲しみ、切なさによって、いささか、みたされる

時はあるだろう。それにすら、みたされぬ魂があるとい
うのか。ああ、孤独。それをいいたもうなかれ。孤独は、
人のふるさとだ。恋愛は、人生の花であります。いかに
退屈であろうとも、このほかに花はない。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館